



# 文教大学の授業



2018.9.19 No.66

文教大学教育研究所  
埼玉県越谷市南荻島3337  
TEL 048-974-8811 フax 343-8511

## 「学び」かつ「思う」ために —中国古典学講義Ⅱにおける試み—



文学部 渡邊 大

専門は中国古典学。経学（儒教經典の解釈学、特に小学と呼ばれる文字学）、目録学（図書目録から、学術を辨章し源流を考鏡する、学問の學問）、清代考証学（実事求是を掲げる文献学）などを通じて、儒教的価値観に強く規制されてきた前近代における中国の学問のあり方について考えている。（わたなべ だい）

大学の授業で何を身につけるのか？一教員としては「専門の学びを通して自分の頭で考える力」とこたえたい。論語に所謂「学（知識）」と「思（思考）」の両立<sup>†</sup>を目指して試行錯誤している中国古典学講義Ⅱについて報告し、大方の示教を乞うこととする。

<sup>†</sup> 「学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆うし」（『論語』為政篇）

### 1. 中国古典学講義の位置づけ

中国語中国文学科では、2年次より、A（中国語学・応用中国語）、B（中国古典・教養）、C（中国現代社会・文化）のうち、いずれかのコースに所属する。中国古典学講義Ⅰ（春学期）・Ⅱ（秋学期）は、Bコース2年次の学生を主たる対象とし、中国古典学概説を承け、また、3年次から始まる卒業研究を視野に入れつつ、各論（Ⅰは論語、Ⅱは史記）によって、中国古典に関する基本的知識とその研究方法について理解を深めることを目標としている。

### 2. 「読む」を考える

Iでは、孔子の伝記と思想、論語の成立や伝流、解釈史、日本における受容などについて順次講義するが、Ⅱは、まず鴻門之会の講読から始める。受講生の多くが見知っている文章をあえて取り上げるのは、読むということについて考えるためである。漢字の意味が分かり、語と語の関係や句の構造を理解するのも読むことには違いないが、訳文を完成させただけでは本当に読んだことにはならない。たとえば剣舞の場面ひとつ取っても、范增は

なぜ沛公（劉邦）抹殺にこだわるのか、なぜ自ら手を下さず項莊を使い剣舞に言寄せようとしたのか、項王（項羽）はなぜ范增の目配せを黙殺しながら項莊の申し出には「諾」と応じるのか、項伯はなぜ剣舞の相手をするのか、劉邦はなぜ何も言わないのか、張良はなぜ宴席をはずして樊噲を呼びにいくのか、などと考えだと、読むということが通り一遍ではすまないことに多くの学生が思いいいたるようである。

### 3. 「解釈」を吟味する

続いてNHK「その時歴史が動いた」で鴻門之会がどのように描かれているかについて検討する。番組では、項羽を武勇に秀でた大義の人、劉邦を知略に長けた寛仁の人とし、リーダーとしての兩人を比較している。講読の際には、項羽の行動原理を快不快とし、劉邦は自らの失策で窮地に陥り、ただひたすらに張良、樊噲の活躍によって虎口を脱する（しかしその劉邦が後に天下をとることがよく分かるように書かれているのが鴻門之会の面白さである）と解説しておき、番組が項羽と劉邦に光を当てるあま

りに二人の軍師による智謀の戦いが霞んでしまっていること、項伯と張良の任侠的紐帯が等閑にされていることなどに気がつき、映像と比較しながら文字という表現手段の特徴とともに、ひとつの文章の捉え方は決して一様でないということを実感するのが狙いである。

#### 4. 「形式」の意味を知る

さらに史記が紀伝体によって記されていることに注意を向け、高祖本紀や留侯世家で鴻門之会やその前後がどのように扱われているのかについて考察をすすめていく。劉邦が咸陽宮を封鎖して霸上に駐屯した経緯や法三章の故事などをあわせ読むことで、あらゆる文章は特定の立場から書かれたものであること、史記は、ひとつの事柄について様々な立場から記された諸資料を各処に配することによって、人間を単純な優劣、善悪、好惡で評価することを拒絶していること、そのような陰影に富む人物造形は紀伝体という形式を通して可能になるということを指摘する。

#### 5. 研究は「疑問」から始まる

世界を所与のものとして受け入れている限り、新たな発見は生まれない。講義では、どんなに些細でも疑問を持つことは研究の第一歩であること、小さな疑問を大きな疑問に繋げていくことが重要であることを伝えている。たとえば、司馬遷は、先行する諸資料をどのように利用して史記を編纂したのだろうか、もし史記が切り貼りでできているとしたら、史記の作者を司馬遷としてよいのだろうか、など考えることは、いうまでもなく、作者とは何かという、文学にとって大きな問題にながっている等々。

#### 6. 「仮説」を立てることを学ぶ

よい仮説はそれによって様々な事柄をうまく説明すると同時により深い問題を提起してくれる。たとえば宮崎市定は鴻門之会の一段を後世の語り物に由来すると主張した。そう考えると、当時まだ西楚の霸王とも号していない項羽が項王と称されていること、漢帝国成立後に置かれた新豊という地名が登場すること、樊噲に与えられたのが生彘肩であること、劉邦が霸上まで逃げ帰る間に張良はどのように時間を稼いだのか、項羽は黙って待っていたのかなどの疑問が氷解する。同時に、では史記にとって事実とは何か、史記は本当

に歴史書なのか、など、より大きな問題が新たに立ち現れ、さらに太史公自序や伯夷列伝などを読んだり、武帝期という時代について考えたりする必要がてくる。カートに乗って進む遊園地のアトラクションのようではあるが、部分から全体を、全体から部分を考えながら、事柄のむこうに意味を見出す研究を疑似体験することにも相応の意味はあると考えている。

#### 7. ことばを知り、人を知る\*

文学部は「ことば」について、また、ことばを通して「人間」について、知り、考えるところであろう。ことばとは、人間とは、といった答えのない大きな問いを遠くに意識しつつ、史記五十数万言を「天道是か非か」の一言で蔽うことも、たった一字にどこまでもこだわることも大事にしたい。何が書かれているのかとともに、それがどのように表現されているか、にも十分な注意を払いながら、(中国古典はとくに教訓と結びつきやすいが、それよりも)鳥のように、あるいは虫のように、様々にものを眺める力を身につけることを目指して。「迂なるかな」という声には「すぐに役に立つことはすぐ役に立たなくなる」という小泉信三の至言(本当は「こと」ではなく「本」であるが)を借りてこたえとしよう。

\*「言を知らざれば以て人を知る無きなり」

(『論語』堯曰篇)



和刻本『史記』評林、八尾初刻初印本(左)と八尾初刻元文修訂本(右)。右は左の版木から訓点を取り去って白文本としたものであることが分かる。その間約百年に及ぶ学問の推移や書肆の角逐をここにうかがうことができる。ともに水澤利忠博士の衣鉢を伝える本学の史記コレクションである。